

日付		科 目	講 師	タ イ ト ル
10月	7日 (土)	1 復興の思想	沢田康次(東北工業大)	東北の復興と人口流出
		2 復興の社会学	稲村 肇(東北工業大)	復興とは何か？ 防災集団移転と復興の持続性
	14日 (土)	3 復興の社会学	奥村 誠(東北大)	津波避難における自動車利用の問題
		4 復興の社会学	奥村 誠(東北大)	携帯電話位置情報データから見える災害の広がりと復旧のプロセス
	21日 (土)	5 復興の科学技術	今村 文彦(東北大)	東日本大震災後の災害科学分野の発展と課題
		6 復興の思想	芳賀 満(東北大)	復興と歴史—過去から未来へ(1) 復興と歴史—過去から未来へ(2)
	28日 (土)	7 復興の科学技術	神山 真(東北工業大)	地震防災・減災の要諦—『地震』と『地震動』の識別—
		8 復興の科学技術	今西 肇(東北工業大)	資源循環を考慮した災害廃棄物の有効利用
11月	11日 (土)	9 復興の科学技術	船木 尚己(東北工業大)	地震による建物の損傷抑制と機能維持をめざして
		10 復興の生活構築学	竹内 泰(東北工業大)	生活構築におけるきつかけの発見
	18日 (土)	11 復興の経済学	小祝 慶紀(東北工業大)	被災地の復興と公共交通の復旧の果たす役割は何か—JR気仙沼線のBRT化の現状と課題から—
		12 復興の科学技術	織原 彦之丞(東北工業大)	セシウム-137等による放射能汚染が復旧・復興の妨げにならないように 環境のガンマ線、ベータ線測定実習
	25日 (土)	13 復興の経済学	伊藤 房雄(東北大)	どこまで進んでいるの？津波被災地の農業・農村復興
		14 復興の生活構築学	菊地 良覚(東北工業大)	地域の生産と暮らしをデザインする～雄勝硯生産販売組合の再生を事例として～
			菊地 良覚(東北工業大)	これからの地域の食をデザインする～給食事業者からの問題提起～ ゲストスピーカー：吉田 雄次(セントラルキッチン協会・副代表理事)
	12月	15 復興の社会学	平本 福子(宮城学院女子大)	学生の若い力が輝く復興支援活動—人の役に立つ喜びに出会う若者たち—
		16 復興の科学技術	日野 亮太(東北大)	東北地方太平洋沖地震の科学
		17 復興の政治学	片山 文雄(東北工業大)	政治とは何か？ 政治に何ができるか？
		18 復興の政治学	片山 文雄(東北工業大)	政治と科学はどう関係するか／すべきか？
		19 復興の生活構築学	新井 信幸(東北工業大)	復興における居住支援とコミュニティデザイン
		20 復興の生活構築学	新井 信幸(東北工業大)	災害危険区域と復興の自由
1月	20日 (土)	21 復興の生活構築学	伊藤 美由紀(東北工業大)	地域包括ケアシステムの構築に向けての実践的な試み—地域防災活動から生まれた住民や団体の交流と連携— ゲストスピーカー：松永 なおみ(八木山地域包括支援センター 生活支援コーディネーター)
			大沼 正寛(東北工業大)	集落住宅のゆくえを考える その1 沿岸部の防災集団移転・気仙沼小泉地区の場合
		22 復興の生活構築学	大沼 正寛(東北工業大)	集落住宅のゆくえを考える その2 都市集住への順応と課題・あすと長町の場合 ゲストスピーカー：宮本 愛 (NPOつながりデザインセンター・あすと長町事務局長)
			大沼 正寛(東北工業大)	集落住宅のゆくえを考える その2 都市集住への順応と課題・あすと長町の場合
	27日 (土)	23 復興の思想	邑本 俊亮(東北大)	災害と人間の心理
		24 復興の思想	邑本 俊亮(東北大)	将来へ備える～私たち一人一人にできること～
	2月	25 復興の科学技術	遠田 晋次(東北大)	活断層と内陸地震の科学
		26 復興の科学技術	遠田 晋次(東北大)	連鎖する大地震と地震ハザードの時間変化
		27 復興の思想	窪 俊一(東北大)	震災の記憶を紡ぐ(1) ゲストスピーカー：櫻井 みや子(東北大学大学院 情報科学研究科)
			窪 俊一(東北大)	震災の記憶を紡ぐ(2) ゲストスピーカー：佐々木 加奈子(東北大学大学院 情報科学研究科 研究員)
		28 復興の思想	窪 俊一(東北大)	震災の記憶を紡ぐ(2) ゲストスピーカー：佐々木 加奈子(東北大学大学院 情報科学研究科 研究員)
		29 復興の経済学	金井 辰郎(東北工業大)	主観的情報に基づく地域復興策の検討：幸福の経済学と仮想市場評価法
10月	27日 (金)	現場実習	今西 肇(東北工業大)	関上・山元コース
	12日 (日)	現場実習	菊地 良覚(東北工業大)	石巻・雄勝コース サブモデレーター：伊藤 美由紀(東北工業大学)
11月	17日 (金)	現場実習	三部 佳英(宮城県住宅センター顧問)	女川・東松島コース

10月7日(土)

講座 1 (13:30~14:30) 復興の思想(1)

東北工業大学 沢田 康次

タイトル：東北の復興と人口流出

授業の様子：私たちの「復興」は何を目指していて、今どこにいるのか？という問題提起から始まり、講義の一週間前に沢田先生が見た南三陸・雄勝・女川地区の写真を紹介しながら、東北の人口減少について論じられました。講義の最後に、沢田先生が提起した「人口減少が続けば、真の復興は遠のく。この原因は何だと思いますか。」というディスカッションテーマについて、受講生たちが意見を交わしました。人口減少をしても真の復興はできるのではないか、という意見や、個人の復興と集団の復興では観点が少し違うのではないかなど、多くの意見が出ました。



講座 2 (15:00~16:00) 復興の社会学(1)

東北工業大学 稲村 肇

タイトル：復興とは何か？ 防災集団移転と復興の持続性

授業の様子：復興とは何か、という導入から、3.11の津波の被災地の移転促進地域を取り上げ、沿岸地域が非居住地域に指定されている問題点を受講者と共に考えました。また最後に、「十八成浜を見るように、震災を契機に、多くの人々が故郷を離れ、仙台や東京に行った。このような状況下で、我々は何をすべきか？」という問題提起について受講生がそれぞれ意見を述べました。稲村先生は気仙沼の小泉地区を取り上げ、自身の問題提起への答えとして「どのように地区を保って行くかではなく、新しい小泉村(歴史)をつくり、新しい本吉町へと発展させて行くことが考え方の一つとしてあるのではないかと論じられました。



10月14日(土)

講座 3 (15:00~16:00) 復興の社会学(2)

東北大学 奥村 誠

タイトル：津波避難における自動車利用の課題

授業の様子：奥村誠先生の講義が2講連続で行われました。前半の講義は、津波からの避難についてのお話でした。交通工学を用いたモデルを用いて、どのように避難すれば津波の被害者を少なくできるかについて、奥村先生が過去に行った研究を紹介されました。そこから津波避難時にしてはいけないことや、皆が最短経路のみを考えて避難行動すると逆に人的被害が大きくなってしまふことなどについて学びました。また、授業終わりにはスマホなどの最新技術を使った避難誘導などについて多くの質問ができました。



講座 4 (16:30~17:30) 復興の社会学(3)

東北大学 奥村 誠

タイトル：携帯電話位置情報データから見える災害の広がりや復旧のプロセス

授業の様子：奥村誠先生による後半の講義では、自然災害による都市機能・活動の低下がどのように起こり、どの程度の期間で回復するのかについて行った研究を紹介されました。携帯電話の位置情報を用いて、東日本大震災や熊本地震発生後と平常時の地域ごとの人口分布の違いを研究したもので、人口分布が平常時に戻るまでの期間に商業地や工業用地など地域の特性によって差があるなど、自然災害からの都市機能・活動の回復の特性について学びました。また、授業終わりには位置データなどの個人情報の取得・取り扱いの難しさについて質問がありました。



10月21日(土)

講座 5 (13:30~14:30) 復興の科学技術(1)

東北大学 今村 文彦

タイトル：東日本大震災後の災害科学分野の発展と課題

授業の様子：今村先生が震災後どのような取り組みを行っているのか、また、先生の専門である震災時の津波の挙動やその被害などについてお話をいただきました。取り組みについては、先生が震災後立ち上げた災害科学国際研究所が行っている、工学・理学・医学・歴史学などの他の分野と連携した震災についての研究・活動について紹介されました。また、先生は津波の研究だけでなく、将来の防災・減災のために世界会議や震災の伝承について現在取り組んでいる活動を紹介されました。授業終わりには東日本大震災における津波避難について受講者から質問があり、丁寧に回答いただきました。



講座 6 (15:00~17:30) 復興の思想(2)

東北大学 芳賀 満

タイトル：復興と歴史—過去から未来へ (1) (2)

授業の様子：芳賀先生からは、考古学と大災害の関係性についてお話しがありました。まず、先生は、考古学は災害直後を考えれば必要のないものであるが、一個人が体験できる範囲を超えた相対化の機能を持っていると指摘されていました。古代ローマのポンペイの遺跡でも、発見された遺体(化石)の様子から火砕流から逃げなかったことが伺われる。何故なのか。東日本大震災の津波からの逃げ遅れとも共通の課題がみられると提起されました。人類の歴史は災害の歴史であるが、地球全体の歴史から見れば人間はごく最近生まれたもので、いつかは人間も他の種に交替される存在であるということを指摘され、大きな視野で物事を見つめ直すと、物事の違う側面が見えてくることを学びました。



10月28日(土)

講座 7 (13:30~14:30) 復興の科学技術(2)

東北工業大学 神山 眞

タイトル：地震防災・減災の要諦—『地震』と『地震動』の識別—

授業の様子：神山先生の授業では、地震動のメカニズムや一般的によく使われているマグニチュードや震度などの用語について、また緊急地震速報など地震時の情報伝達の仕組みや、その情報を受け取る時の姿勢について学びました。地震動の解説では先生が行われた東北地方太平洋沖地震の震度分布の調査から、同じ仙台の中でも地盤が柔らかく震度が大きい場所や地盤が硬く震度が小さい場所など偏りがあることなども学びました。また、それに関連して緊急地震速報の情報について正確でない場合などがあり、授業で学んだ知識を用いて自分の状況を判断し、自らを自らで守る姿勢が大切だとお話しされました。



講座 8(15:00~16:00)復興の科学技術(3)

東北工業大学 今西 肇

タイトル：資源循環を考慮した災害廃棄物の有効利用

授業の様子：今西先生の講義では、津波などによる震災瓦礫の再利用についてどのような手続きで行ったのかを先生が作成されたガイドラインに沿って学びました。実際に前日に行われた現場実習で見学した震災瓦礫を使用した防潮堤などの話などを交え、震災瓦礫を使用するにはどのような法律があって、どのような基準をクリアしないといけないかなど、かなり具体的なことで学ぶことができました。授業終わりには震災瓦礫を使用する時のコストなどについての質問があり、環境負荷などを考慮に入れると震災瓦礫を使用することはコスト的にも合理的であると回答されました。



11月11日(土)

講座 9(13:30～14:30)復興の科学技術(4)

東北工業大学 船木 尚己

タイトル：地震による建物の損傷抑制と機能維持をめざして

授業の様子：地震による建物への影響とその対策についてお話をいただきました。まず、日本の地震対策の歴史や先生が行われた調査から、地震大国である日本独自の地震への対応の変遷や、現在日本が行なっている地震対策について学びました。また、メディアテークなどの被災事例から地震によって天井や間仕切り壁、貯水タンク等が破壊され、建物の構造的には問題がなくても、建物が使用できなくなる場合があることを学びました。最後に、現代の地震対策として耐震構造、免震構造、制震構造それぞれの機構と特徴について学びました。授業終わりの質問では、免震構造などは縦揺れに対しては効果があるのかなど、鋭い質問もありました。



講座 10(15:00～16:00)復興の生活構築学(1)

東北工業大学 竹内 泰

タイトル：生活構築におけるきっかけの発見

授業の様子：竹内泰先生による講義は、研究者による震災復興支援のお話でした。インドネシア、日本(南三陸町志津川)、ネパールの各地で被害調査と復興支援に携わってきた経験をお話していただきました。そのなかで、復興支援を行うにあたっては、普段の研究とは違い、クライアント(建築主)だけではなく周囲の環境や様々な主体を理解することや、時間の経過にあわせて技術を提供していくことが求められるということを知りました。県民講座では初めて海外の震災の様子が紹介され、受講生は宗教・文化が違う地域での支援活動の様子などについて関心を寄せていました。



11月18日(土)

講座 11(13:30～14:30)復興の経済学(1)

東北工業大学 小祝 慶紀

タイトル：被災地の復興と公共交通の復興の果たす役割は何か-JR 気仙沼線の BRT 化の現状と課題から-

授業の様子：小祝先生から鉄道の社会的評価の算出方法として、営業係数と費用便益分析に関する理論面の講義があり、震災後に JR 気仙沼線が BRT 化された現状の具体例を提示しました。鉄道の復旧・復興を評価するためには社会的、環境的な便益を考えるといいのではないかと、という問題提起をされました。受講生に馴染みのない理論面も分かりやすい具体例を示して説明されました。授業の最後に受講生から BRT に関する質問があり、議論が交わされました。



講座 12(15:00～17:30)復興の科学技術(5)

東北工業大学 織原 彦之丞

タイトル：セシウム-137 等による放射能汚染が復旧・復興の妨げにならないように

タイトル：環境のガンマ線、ベータ線測定実習

授業の様子：前半は放射線にまつわるベクレル、シーベルトなどの用語の説明や放射線とはどういうものなのか、科学的な知見から講義がありました。少し情報量が多く、受講生の中には少し理解が追い付かない様子も見られました。科学的な「安全」と一般の人の考える「安心」には開きがあり、それを少しでも小さくするためには正しい知識を学んでいくことが重要であると感じました。引き続き後半では放射線測定実習を行いました。受講生はガンマ線、ベータ線を自らの手で測定し、自分の目で値を確認することができ、少しは放射線が身近になったような手ごたえが感じられました。今後もこれからの日本を考えていく上で、個人個人の知識の糧になりました。



11月25日(土)

講座 13(13:30～14:30)復興の経済学(2)

東北大学 伊藤 房雄

タイトル：どこまで進んでいるの？津波被災地の農業・農村復興

授業の様子：農業復興についてのお話でした。宮城県、福島県における農業の復興の様子と今後の展開について、事例を交えて紹介していただきました。その中で、被災地において技術導入や効率化、高付加価値化による先進的な農業がおこなわれていることや、今後は儲かる農業はもちろん地域コミュニティに根付いた農業が重要になるということを学びました。授業終わりには、今後の農業の展開についての質問などが寄せられました。



講座 14(15:00～17:30)復興の生活構築学(2)

東北工業大学 菊地 良覺

タイトル：地域の生産と暮らしをデザインする～雄勝硯生産販売組合の再生を事例として～

タイトル：これからの地域の食をデザインする～給食事業者からの問題提起～

ゲストスピーカー：吉田 雄次(セントラルキッチン協会・副代表理事)

授業の様子：前半は被災地支援の事例(地域産業再興支援)についてのお話でした。石巻市雄勝町において600年の歴史を持つ雄勝石の産業再興をめざして、主な加工品である雄勝硯の流通確保や新たな加工品の開発、90歳ヒアリング、祭事による周知活動などを行ったことを紹介していただきました。その中で、地域産業を再生し発展させていくためには人材教育などの人の力が最も重要であると学びました。引き続き後半はゲストスピーカーの吉田氏による、食事に関する講義でした。行政による避難所での食事提供の不足点についてと、好き嫌いやカタカナ食の普及、家電の進化による調理の自動化など昔とは違う現代の食生活の問題点についてお話していただきました。その中で、避難所運営においては食料供給でも民間と行政の連携が必要であることや、人の生活に大きくかわる食育の重要性について学びました。



12月2日(土)

講座 15(13:30～14:30)復興の社会学(4)

宮城学院女子大学 平本 福子

タイトル：学生の若い力が輝く復興支援活動一人の役に立つ喜びに出会う若者たちー

授業の様子：食を通して心の復興に取り組む様子が良く分かる講義でした。宮城学院女子大学の特長や、平本先生の特性を生かし、食の力をうまく利用した震災復興の一つのあり方が提示され、受講生も考え方の幅が広がる機会となりました。これらの内容を踏まえて、受講生からは大学間の連携や学生の勉強時間の確保、またはボランティアに参加した学生への単位認定など、今後ボランティア活動を続けていくための制度的な仕組みについて質問がありました。



講座 16(15:00～17:30)復興の科学技術(6)

東北大学 日野 亮太

タイトル：東北地方太平洋沖地震の科学

授業の様子：3.11は何が起こったのか、なぜ宮城県で起こったのか、予兆はあったのか、これからどうなるのか、教訓を活かす、の構成で地震工学の視点から講義されました。授業時間の制約がある中で、私たちが普段用いる「地震」の全体像を分かりやすく掴めました。授業の最後には受講生から福島第一原発事故における『想定外』ということについて科学者の立場からどのように捉えているかという質問がありました。現代科学で捉えている事実を誠実に伝えるというお話に、改めて地震の脅威と真摯に向き合う姿勢を考えさせられました。



12月9日(土)

講座 17(13:30～14:30)復興の政治学(1)

東北工業大学 片山 文雄

タイトル：政治とは何か？ 政治に何ができるか？

授業の様子：『政治とは集合的決定である』という話から講義が始まり、その上で『政治を「上手に」行うために、どういう方法がとられるのか』という内容を、政治学を専攻にしていなくても分かりやすく、丁寧に、具体例を交えながら説明されました。政治家が政策を決定する際の異論を封じ込めるための手法を挙げ、特に20世紀以降は科学を根拠とした異論の封じ込めが行われているというお話がありました。受講生からは被災地の震災遺構の存続をめぐる、「みんなで決める」という決定方法と「リーダーが未来を見据えて決める」という方法どちらが良いのかという質問があり、議論が交わされました。



講座 18(15:00～16:00)復興の政治学(2)

東北工業大学 片山 文雄

タイトル：政治と科学はどう関係するか／すべきか？

授業の様子：異論を封じ込めるための政治的な手法としての「科学」というテーマでの講義でした。まず、福島第一原子力発電所の事故において科学者はいかに正しく、いかに間違ってきたか、どのように政治的に利用されてきたかを振り返りました。次に、我々一般市民は科学をどのようにとらえているのかを指摘し、本来科学とはどのようなものであるのかについて科学哲学の観点から論じられました。そして政治と科学はどのように関わっていけばいいのかいくつかの提案がなされ、受講生からも原発事故における科学者の責任に対する意見がいくつか出てきて活発に議論が交わされました。



12月16日(土)

講座 19(13:30～14:30)復興の生活構築学(3)

東北工業大学 新井 信幸

タイトル：復興における居住支援とコミュニティデザイン

授業の様子：新井先生がこれまで行ってきた復興コミュニティデザインの一例や平時の居住支援、また復興過程の居住支援、仙台市内のみなし仮設における不動産業者の対応実態調査の結果を、分かりやすい言葉に写真を交えて講義されました。「仮設住宅」と聞くとプレハブの仮設住宅を思い浮かべるが、実際は既存の建物を利用するみなし仮設住宅が多いということが分かり、まだまだ復興に関する学びの必要性や面白さを感じました。受講生からは、みなし仮設の賃貸のヒアリングの中で、喫煙者お断りの例はあったかという質問や、公共料金の支払い状況を見守りの役割として用いるのはどうかという意見が出されました。



講座 20(15:00～16:00)復興の生活構築学(4)

東北工業大学 新井 信幸

タイトル：災害危険区域と復興の自由

授業の様子：災害危険区域の復興を仙台市の荒浜を事例に紹介されました。始めに、震災前の荒浜の暮らしと震災後の暮らしを捉えたドキュメンタリーの映像をみんなで見て、震災前の「被災地」の様子を考慮しながら、今後の荒浜地区の復興を想像しました。また、同地区の復興の具体的な事例として、「荒浜再生を願う会」の、ふるさと蘇生活動や公開討論会(荒浜アカデミア)、将来像づくりの活動を取り上げました。受講生からいくつか質問や意見が出され、災害危険区域に指定した行政の手法について、そもそも我々一般市民の行政依存の体質が原因として考えられるのではないかなどという議論が交わされました。



1月20日(土)

講座 21(13:30～14:30)復興の生活構築学(5)

東北工業大学 伊藤 美由紀

タイトル：地域包括ケアシステムの構築に向けての実践的な試み-地域防災活動から生まれた住民や団体の交流と連携-
ゲストスピーカー：松永 なおみ(八木山地域包括支援センター 生活支援コーディネーター)

授業の様子：始めに松永氏から、八木山地区の地域包括ケアの構築に向けた実践的な取り組みに関するお話がありました。後半は伊藤先生から、産学官連携による地域防災活動の一例として、八木山地区での自助や健康維持推進活動、認知症の予防・支援のイベントの紹介があり、大学生が地域の子供達へ防災のゲームを教える等、大学と地域の連携が見て取れました。最後、受講生から質問があり、個人情報保護の観点から防災上の情報共有システムの必要性和難しさに関して意見が交わされました。個人情報との付き合い方は、介護や病院、地域でも共通の課題であるという意見もありました。



講座 22(15:00～17:30)復興の生活構築学(6)

東北工業大学 大沼 正寛

タイトル：集落居住のゆくえを考える その1 沿岸部の防災集団移転・気仙沼小泉地区の場合
ゲストスピーカー：坪内 健(北海道大学工学院)

タイトル：集落居住のゆくえを考える その2 都市集住への順応と課題・あすと長町の場合
ゲストスピーカー：宮本 愛(NPOつながりデザインセンター・あすと長町事務局長)

授業の様子：まず坪内氏が、気仙沼市小泉地区を事例とした沿岸部の防災集団移転に関する講義を行いました。小泉地区の住民の主体的な街づくりの様子やその街づくりの様子の説明がありました。宮本氏は、あすと長町を事例とした都市集住への順応と課題についてお話されました。あすと食堂、岩沼市玉浦西地区での中庭菜園化計画の二つの具体的な活動の紹介の際は、おばちゃん達の笑い声が聞こえてくるような写真が印象的でした。最後に「集落居住のゆくえを考える」をテーマに二人の話題提供者に受講生を交えてディスカッションしました。小泉地区においては専門家から住民にどのように街づくりのフェーズを移行していくのかの議論がなされました。



1月27日(土)

講座 23(13:30～14:30)復興の思想(4)

東北大学 呂本 俊亮

タイトル：災害と人間の心理

授業の様子：災害発生時における心理学について学びました。まず、災害時によくパニックが起こると言われるがパニックは稀にしかおこらず、しっかりと根拠を示して避難指示を出すべきであるということでした。また、その避難情報を受け取る際に被災者はどのような認知的なバイアスや特性があるのかということを簡単な実験を通して体感し、理解しました。最後に被災者とのコミュニケーションについて正解はなく、相手との関係性で成り立つものなので、相手のことをよく理解してコミュニケーションを行わなければいけないことを学びました。



講座 24(15:00～16:00)復興の思想(5)

東北大学 呂本 俊亮

タイトル：将来へ備える～私たち一人一人ができること～

授業の様子：将来の災害に対して備えるために私たちができることについて心理学的側面から学びました。災害について「知ること」、「育むこと」、「忘れないこと」が大切であり、「知ること」については、情報を受け取ることは受け取る人の知識や経験が必要であるということを確認しなければならぬこと、また知識を持っていれば良いということではなくて、活性化することが大切であるということを知りました。「育むこと」については、災害時に必要な自分の力を客観的に理解してそれを使っていくこと、人間は同じ場所で思い出しやすいので現地での防災訓練は効果的であるということでした。「忘れないこと」については関上小学校の慰霊碑の横の机の例から、如何にして今の人に伝えるかということ、記憶を上書きすることが大事であるということを知りました。



2月3日(土)

講座 25(13:30～14:30)復興の科学技術(7)

東北大学 遠田 晋次

タイトル：活断層と内陸地震の科学

授業の様子：活断層地震のメカニズムを過去の様々な事例をもとに説明されました。ひと口に活断層地震と言ってもいろいろなパターンがあることがわかりました。人の目では直接見ることが出来ない地震という事象を、様々なデータの分析や、地表に現れた断層のずれの観察から推測していくプロセスについて丁寧に説明されました。地震の仕組みがわかれば地震に対する我々の防災意識が変化するのではないかと授業冒頭で教示がありましたが、自分の住んでいる場所がどのような地形で、どのような災害が起こりうるのかを考える機会になりました。受講生からは、日本に原発をつくろうとしたときに、地震に対する知見が今より劣っていたのではないかと、なぜ熊本地震で地面が引き裂かれるような力が地盤に加わるのかの質問が出、板書でのプレートの図解も交えながら丁寧な回答をいただきました。



講座 26(15:00～16:00)復興の科学技術(8)

東北大学 遠田 晋次

タイトル：政治と科学はどう関係するか／すべきか？

授業の様子：長町利府線断層を中心に講義がなされました。大年寺山や三神峯公園が、なぜ土地の隆起によって形づくられたのか、川や山、丘の位置関係をよく観察し分析することでわかるということが理解できました。仙台市民にはなじみのある場所だけに、改めて地元の地形を観察してみたくなる講義でした。受講生からは高度な質問がなされ、地震の仕組みに関する関心の高さがうかがわれました。



2月10日(土)

講座 27(13:30～14:30)復興の思想(5)

東北大学 窪 俊一

タイトル：震災の記憶を紡ぐ (1)

ゲストスピーカー：櫻井 みや子 (東北大学大学院 情報科学研究科)

授業の様子：窪俊一先生による1時間目は櫻井みや子先生(東北大学)による震災の記憶を語り継ぐ取組についての講義でした。櫻井先生の動画作品・著書の朗読を見せていただきました。震災から時間が経過するにつれ震災の記録が語られることが少なくっており、震災を機に家族や地域住民が離散する状況のなかで今後どのように語り継いでいくべきかという課題があることを学びました。



講座 28(15:00～16:00)復興の思想(6)

東北大学 窪 俊一

タイトル：震災の記憶を紡ぐ (2)

ゲストスピーカー：佐々木 加奈子 (東北大学大学院 情報科学研究科 研究員)

授業の様子：窪俊一先生による2時間目は佐々木加奈子先生(東北大学)による震災の記憶を語り継ぐ取組についての講義でした。福島県双葉郡浪江町の記憶を守るために語れる場を創造する取組とアプリについて紹介していただきました。単に震災の教訓を伝えるだけでなく、個人の物語を第3者がアートに変化させることで、より効果的に語り継いでいける可能性について知りました。



2月17日(土)

講座 29(13:30～14:30)復興の経済学(3)

東北工業大学 金井 辰郎

タイトル：主観的情報に基づく地域復興策の検討：幸福の経済学と仮想市場評価法

授業の様子：旧来の経済学ではGDPや失業率など客観的なデータを基に市場を分析していたが、これでは未来を予測できないという経済学における限界を示し、「幸福の経済学」について提示がありました。幸福の経済学とは「あなたは幸福ですか？」のような主観的なアンケートを基に複数の事項の相関関係を分析し予測するもので、講義では、震災復興と人口減少問題についてその場で機器を用いてアンケートをとり相関関係を計算し、実際の活用法を実践して見せていただきました。復興のまちづくりや国政の政策作りにどのように活かしていけばよいのか、実感として理解することが出来る講義でした。会場からは「アンケートをうまくつることで悪用できるのではないか」という意見も出ました。その点においても新しい学問を正しく利用するには正しい認識が必要であると考えさせられました。



講座 30(15:00～16:00)復興の思想(7)

東北工業大学 沢田 康次

タイトル：東北文化とは？復興に必要な文化の条件

授業の様子：「東北が日本の未来を作る」というテーマに、東北がどのような歴史を歩み、どのような価値観を持っているのかの説明があり、東北が日本および世界に対して何ができるか問う授業でした。また、現在の科学信仰に対しても講師の沢田先生自身が物理学者という立場から、科学的なスケール感覚をもつ大切さと、逆に科学的な視点の危うさを説かれました。「人間としてそんなはずはないと言い切ることが大事」と人間の直観の大切さも説かれました。講義全体を通して抽象的な問いかけだったので、受講生からも様々な観点から東北や日本が今後どうすればよいのかという意見が飛び交いました。



沢田康次先生による第1講目の様子



第12講の実験風景



ゲストスピーカーを交えてのディスカッション



第30講終了後受講生に修了証を配布

モデレータ：今西 肇 東北工業大学 名誉教授

●現場実習における学習のポイント

関上地区のかさ上げ工事の実際を見学し、岩沼市の千年希望の丘では、津波避難施設の見学と慰霊碑の参拝をしました。亘理町荒浜では、地域の再興を願う商店街と分別された津波堆積土を見学し、山元町では、今も残る津波に襲われた中浜小学校の校舎を訪れて津波被害の大きさを実感し、また日ごろの避難訓練の大切さを学びました。さらに、内陸部に移動し高架式となったＪＲ坂元駅前を見学し、復興の状況を観察しました。

当日は各地の復興現場を見学しました。現地では、それぞれ現地の市・町職員、語り部の会の方々からの震災時の状況や現状を説明いただきました。受講生31名の方々が参加し、とても充実した現場実習となりました。

行程表：

- | | | |
|-------|--------------|-------------|
| 8:20 | 集合 | 仙台駅東口バスプール |
| 8:30 | 出発 | |
| 9:30 | 名取市閑上田和山 | |
| 11:00 | 岩沼市相野釜千年希望の丘 | |
| 12:30 | 亶理町荒浜にぎわい回廊 | |
| | 昼食 | |
| 14:10 | 山元町役場 | 語り部の会合流 |
| 14:30 | 中浜小学校跡 | 語り部の会による説明 |
| 15:00 | 新坂元駅 | 新坂元駅と新市街地見学 |
| 15:10 | 防災交流センター | |
| 16:30 | 仙台駅東口バスプール | 到着・解散 |



岩沼市交流センター



山和日上関市取名



中浜小学校跡

11月12日(日)

②石巻・雄勝コース

モデレータ：菊地 良覺 東北工業大学 ライフデザイン学部長

サブモデレータ：伊藤 美由紀 東北工業大学 安全安心デザイン学科 准教授

●現場実習における学習のポイント

実習では大川小学校旧校舎保存計画や国指定伝統的工芸品雄勝石産業再生状況、雄勝ローズファクトリーガーデン、中心部の9.7m.のかさ上げ整備状況、「おがつ店こ屋街」6周年式典(鼓舞・訪印神楽実演)の状況を現地解説者からの解説を受けつつ学習しました。

昔から漁業と雄勝石産業を生業としてきた15浜からなる雄勝地区は、東日本大震災前は4,300人程が居住していましたが、震災後は1,000人と激減しました。高台移転等の定住人口を如何に増やすか、また石産業・漁業の生業再生が最大の課題となっていました。

当日は現地の市職員、雄勝硯生産販売協同組合の方々から、震災時の映像をもとに状況説明や復興に向けた取り組み及び現状を説明いただきました。受講生49名参加となりバス2台での現場実習となりました。

行程表：

8:20	集合	仙台駅東口バスプール
8:30	出発	
9:45	道の駅「上品の里」	休憩
10:15	大川小学校旧校舎	見学
11:00	雄勝「店こ屋街」	見学・昼食
12:30	雄勝硯生産販売協同組合工房	見学
13:00	かさ上げ工事	見学
13:45	雄勝小・中学校新校舎	見学
15:00	雄勝ローズファクトリーガーデン	見学
17:00	仙台駅東口バスプール	到着・解散



大川小学校旧校舎



雄勝硯生産販売協同組合工房



かさ上げ工事

11月17日(金)

③ 女川・東松島コース

モデレータ：三部佳英 一般財団法人宮城県建築住宅センター顧問

●現場実習における学習のポイント

人口減少が進むリアス地域は甚大な被害となり、地域では創意工夫を凝らして果敢に復興に取り組んでいました。

その例として女川町における人々の復興への思い、暮らしやなりわい、まちづくりなどについて学びました。また、仙台圏に近い東松島市では大規模防災集団移転や買い上げた被災宅地の活用策、学校建設などの先駆的な取り組みを知ることが出来ました。さらに、早期に再整備された石巻魚市場では、主要産業である漁業の復興を考えました。そしてこれら復興に首長、被災者、支援者など、主体の役割が大きいことを確認しました。

復興現場を見学しました。各見学先では、現地の市・町職員の方から、震災時の映像をもとに状況説明や復興に向けた取り組み及び現状を説明いただきました。23名が参加し、バスの中でも熱心にモデレータの説明を聞きました。

行程表：

- | | | |
|-------|--------------|------------|
| 8:20 | 集合 | 仙台駅東口バスプール |
| 8:30 | 出発 | |
| 10:30 | 女川町まちなか交流館 | 復興町づくり説明 |
| 11:10 | 女川町新市街地 | 見学 |
| | 昼食 | |
| 13:00 | 石巻市水産物地方卸売市場 | 見学 |
| 14:20 | 東松島市震災復興伝承館 | 見学 |
| 15:10 | 野蒜ヶ丘地域復興状況 | 見学 |
| 15:30 | 宮野森小学校 | 見学 |
| 17:00 | 仙台駅東口バスプール | 到着 |



女川町まちなか交流館



石巻市水産物地方卸売市場



東松島市震災復興伝承館

発災時に釜石市に滞在されていた明星大学経済学部の関満博（せき みつひろ）教授は、その後も被災地域を調査されており、今回は特に津波被災地域の産業構造の分析結果をもとに、少子高齢化社会における地域産業復興のあり方について提言されました。



京都仙台コンソーシアム
福岡大学市民講座賛助記念シンポジウム

京都仙台コンソーシアム
市民講座賛助記念シンポジウム
2007年10月27日(土) 14:00～16:00
会場：福岡大学市民講座
講師：佐々木 隆一氏
司会：佐々木 隆一氏

明星大学経済学部教授 関 満博 先生

「復興大学 in 熊本」 熊本と宮城の復興を願って 3月9日開催

東日本大震災発災後に開設された「復興大学」による復興人材育成や復興支援活動状況と、その有益性を紹介し、また、震災復興支援活動を行っている熊本県、宮城県両県学生の交流の機会を設け、両県の復興支援ネットワークの拡大と復興人材の育成に資するために、熊本学園大学の共催によるシンポジウムを熊本県において開催しました。

本シンポジウムは、①基調講演、②復興大学の事例発表、③パネルディスカッション、④学生リレートークの4部構成で開催し、熊本と宮城の両県から復興への取り組みが発表されるとともに、それぞれの復興への思いが話されました。本シンポジウムを通して学生同士の交流を深めることができました。

シンポジウムの翌日には、熊本学園大学が取り組むボランティア活動「おひさまカフェ」を行っている益城町の仮設住宅にお邪魔しました。仮設住宅の現状を視察し、実際に地域の方々からお話を伺うことができ、とても貴重な経験となりました。



今西肇先生による基調講演



パネルディスカッションの様子



学生によるリレートーク



修了後の交流会

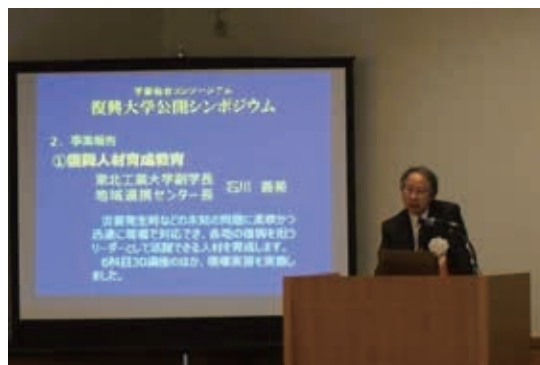
本年度事業の締めくくりとして、3月14日(水)仙台国際センターにおいて事業報告を含めたシンポジウムを開催しました。

本シンポジウムでは、復興大学県民講座の講師もお引き受けいただきました、東北大学 災害科学国際研究所長 今村先生をお招きし、「東日本大震災での経験・教訓を伝承するー後世へのメッセージ」をテーマに御講演いただきました。

また事業報告では、それぞれ各事業代表者による今年度の報告に加え、活動へ参加した学生による今年度の活動紹介や活動を通して学んだこと、復興へ向けた思いが発表されました。



今村文彦先生による基調講演



事業報告



学生による活動報告



展示パネル

県民講座出席データ



開催日		科目	講 師	出席者数
10月7日	1	復興の思想	沢田康次（東北工業大）	41人
	2	復興の社会学	稲村 肇（東北工業大）	40人
10月14日	3	復興の社会学	奥村 誠（東北大）	22人
	4	復興の社会学	奥村 誠（東北大）	22人
10月21日	5	復興の科学技術	今村 文彦（東北大）	22人
	6	復興の思想	芳賀 満（東北大）	18人
10月28日	7	復興の科学技術	神山 眞（東北工業大）	15人
	8	復興の科学技術	今西 肇（東北工業大）	18人
11月11日	9	復興の科学技術	船木 尚己（東北工業大）	27人
	10	復興の生活構築学	竹内 泰（東北工業大）	30人
11月18日	11	復興の経済学	小祝 慶紀（東北工業大）	27人
	12	復興の科学技術	織原 彦之丞（東北工業大）	22人
11月25日	13	復興の経済学	伊藤 房雄（東北大）	28人
	14	復興の生活構築学	菊地 良覺（東北工業大）	35人
12月2日	15	復興の社会学	平本 福子（宮城学院女子大）	23人
	16	復興の科学技術	日野 亮太（東北大）	22人
12月9日	17	復興の政治学	片山 文雄（東北工業大）	26人
	18	復興の政治学	片山 文雄（東北工業大）	25人
12月16日	19	復興の生活構築学	新井 信幸（東北工業大）	28人
	20	復興の生活構築学	新井 信幸（東北工業大）	27人
1月20日	21	復興の生活構築学	伊藤 美由紀（東北工業大）	45人
	22	復興の生活構築学	大沼 正寛（東北工業大）	38人
1月27日	23	復興の思想	呂本 俊亮（東北大）	21人
	24	復興の思想	呂本 俊亮（東北大）	23人
2月3日	25	復興の科学技術	遠田 晋次（東北大）	24人
	26	復興の科学技術	遠田 晋次（東北大）	25人
2月10日	27	復興の思想	窪 俊一（東北大）	42人
	28	復興の思想	窪 俊一（東北大）	36人
2月17日	29	復興の経済学	金井 辰郎（東北工業大）	27人
	30	復興の思想	沢田康次（東北工業大）	32人

累計

831人

現場実習

実施日		コース	モデレータ	参加人数
10月27日	第1回	閑上・山元	今西 肇（東北工業大）	32人
11月12日	第2回	石巻・雄勝	菊地 良覺（東北工業大）	49人
11月17日	第3回	女川・東松島	三部 佳英（宮城県住宅センター顧問）	24人

累計

105人

■ ワークショップの開催



「復興ボランティア学 ワークショップ」とは

講座「復興ボランティア学」の成果を社会還元し、大学生および一般市民の防災減災意識を高めるために、本学学生がファシリテーターとなって実施しているワークショップ。今年度は復興大学事業として2回開催した。

「復興ボランティア学」とは

被災地に立地する唯一の大学である石巻専修大学が「知ること」からはじまる復興支援をテーマにしている。地域の NPO や社会企業家など復興のリーダーたちが講師として登壇する連続講義である。

① 3月11日復興ボランティア学ワークショップ

みやぎ連携復興センターと連携し、「復興ボランティア学 ワークショップ」を開催した。ワークショップへの評価は10点満点で平均8.4点。

3.11 当日、会場のハーネル仙台には、東北医科薬科大学、川村学園大学の学生4名が参加。全体では10代から60代までの幅広い年代の参加者が30名近く集まった。グループワークでは、年代を超えた活発な対話が行われ、震災後に顕在化した地域課題など、から復興や地域防災に関するアクションを考えることができた。途中、震災発生時刻の14:46分を迎え、1分間の黙祷を捧げた。



第2部ストーリー・リーディングの様子



ファシリテーターの学生。
テーブルにも本学学生が座って対話をリードしている。

②3月14日復興ボランティア学ワークショップ

3月14日日本学5号館にて、横浜国立大学・金馬国晴(きんまくにはる)ゼミ11人を対象に「復興ボランティア学ワークショップ」を開催し、本学学生2名がファシリテーターを務めた。

参加した金馬ゼミの学生からは防災意識が向上したという意見の他、「現地の学生と交流できた」「雰囲気温かくて良かった」など、好意的な感想を多くもらった。

ワークショップへの評価は10点満点で平均9.8点。



5年後の課題が解決された世界について考え、発表した。